様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２００９０

研究課題名（和文）日本産ブラジル系プロテスタント教会のトランスナショナルな宗教実践に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Transnational Religious Practice of the Brasilian Protestant Churches borne in Japan

研究代表者
山田　政信（yamada, masanobu）

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：７０４３４９７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、日本産ブラジル系プロテスタント教会を主要な事例として次のテーマについて明らかにした。①ブラジルに帰還した夫婦の再適応戦略としての司牧活動。②ブラジル帰国と再適応：カンポグランデ・ホーリネス教会のケース。③デカセギ現象と日系宗教：マリンガ市の事例。④神の王国ユニバーサル教会の日本における展開。⑤ブラジル系プロテスタント教会の脱領域的なコミュニティ。⑥ヨーロッパのブラジル系プロテスタント教会（予備調査）。⑦日本の韓国系・インドネシア系プロテスタント教会。
　主たる成果は、雑誌論文３件、国内学会発表２件、海外発表２件（うち招待講演１件）、図書１件である。

研究成果の概要（英文）：My research of Brazilian Protestant churches founded in Japan comprises the following themes: 1. The pastoral activities of couples who returned to Brazil that acted as a re-adaptation strategy 2. Return to Brazil and re-adaptation: the case of Campo Grande Holiness Church 3. The decasegui phenomenon and Japanese-Brazilian religion: the case of Maringa City 4. The Universal Church of the Kingdom of God’s growth in Japan 5. The non-regional nature of Brazilian Protestant church communities 6. Brazilian Protestant churches in Europe (preliminary investigation) 7. Corean and Indonesian Protestant churches in Japan.
My research has produced three journal articles, appearances at two domestic academic conferences, appearances at two overseas academic conferences (including once as an invited lecturer), and one publication.

研究分野：宗教学

キーワード：国際情報交流　宗教学　宗教社会学　デカセギ　プロテスタント教会　ブラジル　スペイン　ポルトガル

１．研究開始当初の背景（8000 文字）

本研究は、デカセギが設立した日本産ブラジル系プロテスタント教会に関する、研究代表者のこれまでの研究成果を継承・発展させるものである。デカセギ(decasségui)とは 1980 年代半ば以降、ブラジルやペルーといった南米の諸地域から就労を目的に来日した人々を指すポルトガル語およびスペイン語である。2010 年現在、国内には約 27 万人のデカセギ・ブラジル人が居住しているとされる。彼らの遭遇する諸問題はこれまでさまざまに議論され、その膨大な量の研究成果は枚挙にいとまがない。田島・山脇（「デカセギ現象の 20 年をふりかえる　- その特徴と研究動向 - 」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第 10 号、2003 年、1 ～10 頁）によれば、研究テーマは次の 5 つのテーマに分類され、今日でもその研究状況にはさほど大きな変化はない。すなわち、①国際労働力移動と国際化する日本の労働市場、②日本の地域社会における外国人との「共生」、③異文化間教育・多文化教育、④デカセギのアイデンティティ問題、⑤日本におけるエスニック・コミュニティ形成の可能性、である。

これらのテーマには本研究が目指す、母国におけるデカセギ帰還者の生活実態の理解が射程に入っていない。一方、研究代表者は「グローバル化時代の外国人労働者とホームランド-デカセギ・ブラジル人の事例-」（代表者・三田千代子、基盤研究(C) 2008 年度～2010 年度）に宗教調査で協力し、本研究テーマを萌芽的に扱った。とはいえ、デカセギ研究全般において宗教的側面に関する研究は未だ手薄であり、本研究を開始した当初のころはデカセギが彼ら自身のプロテスタント教会を設立しているという事実は内外の移民研究者はもとより宗教研究者の間でさえほとんど知られていなかった。

田島・山脇が纏めたテーマ群を比較的丁寧に網羅し理論的かつ学術的に評価される研究の代表的な一例として梶田ほか（『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会、2006 年）がある。梶田らはデカセギ帰還者に関心を払っていないとはいえ、本研究との関わりで重要な指摘を行なっている。すなわち、ブラジル人によるブラジル人のためのエスニック・ビジネスが 1993 年ごろから出現したという事実である（梶田ほか　2006 : 220）。研究代表者のこれまでの調査から、デカセギによる日本産ブラジル系プロテスタント教会も丁度同時期に産み出されていることが分かっている。梶田らは、日本におけるブラジル人コミュニティがエスニック・ビジネスと宗教を中心に発達してきたと指摘する（梶田ほか　2006 : 220）。宗教については、カトリック教会と日系新宗教を取り上げ、特にカトリック教会はコミュニティの外部から働きかけを行う最大の教団であるという（梶田ほか　2006 : 223-26）。

しかし、研究代表者が 2008 年以降の研究で明らかにしてきたように(「安住の地としてのプロテスタント教会　－三重県・ベテル福音教会の事例」『アメリカス世界における移動とグローバリゼーション』所収、天理大学出版部、2008 年、184～201 頁、「プロテスタント教会におけるデカセギと日本人の共感的世界」『移民研究年報』第 16 号、日本移民学会、2010 年、23～44 頁、「エスニック・ネットワークの繋留点としてのブラジル系プロテスタント教会」『グローバル化の中で生きるとは－日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』所収、上智大学出版、2011 年)、彼らの議論はデカセギの宗教コミュニティを語るうえで十分な配慮を行っているとは言い難い。なぜなら日本産ブラジル系プロテスタント教会は、カトリック教会に比肩するどころか、時にはそれ以上の多大な影響力をデカセギの宗教実践に与える宗教運動を展開しているからである。

研究代表者がこれまでに確認してきた 7 教団は、それぞれ国内で下部教会を組織化し、教団間でネットワークを広げている。なかにはブラジルに下部教会をグラスルーツ的に設立させ、あるいは既存の教団と連携するなど、デカセギと帰還者の生活世界を日本と母国を同時に跨ぐような仕方で絶えず新たに組み直すのみならず、ペルー、ボリビア、ポルトガルへも教勢を進展させているケースも見られる。

２．研究の目的

本研究は、日本とブラジルの日本産ブラジル系プロテスタント教会において 4 年間の実態調査を行い、デカセギの日本社会への適応と帰国後の新たな環境への再適応に宗教実践がどのように機能するのかを明らかにする。双方向的なベクトルを持つ本研究の問題関心は、宗教研究における喫緊の課題として考察すべきグローバル化と宗教という問題と、移民研究の最前線といえるトランスナショナルな人々の越境の問題に深くかかわっている。本研究は日本とブラジルの二つの国をとり結ぶ宗教運動のバイラテラルなダイナミズムを追求するところに特徴がある。

３．研究の方法

本研究は宗教研究や移民研究のみならず、日本のブラジル研究、ブラジルの日本研究にも寄与するものである。

A)　デカセギの日本社会への適応における宗教実践の機能を探求するため、国内の日本産ブラジル系プロテスタント教会における研究代表者のこれまでの研究を継続するとともに、母国に戻ったデカセギ帰還者にも日本での体験について聞き取り調査を行う。

B)　母国の新たな環境への再適応と宗教実践の関わりを明らかにするため、デカセギ帰還者にブラジルで聞き取り調査を行う。また、日本およびブラジルの宗教研究者らと調査データと研究方法について意見交換を行

うほか、内外の学会発表等で議論を伸展させる。

C) 調査対象者と研究計画の段階でコンタクトをとり、ラポールを構築し、調査への同意を得るように努めた。

４．研究成果

トランスナショナルな宗教実践は、グローバリゼーションの一つの側面といえる。本研究は、日本産ブラジル系プロテスタント教会を主要な事例に取り上げ、その具体的な展開を探求した。研究の俎上に載せた事例は、現在もなお進行しつつある５つの「越境」の様相であり、そこで超えられているものは「国境」、「アイデンティティ（エスニシティ）」、「コミュニティ」、「宗教」、そして「聖俗概念」である。

以下、本研究の成果をテーマごとに記述する。なお、5 つの「越境」のありようは比重を違えながらも各テーマに通底している。

⑴帰還夫婦の再適応戦略としての司牧活動

本調査は帰国して教会を開いた２組の帰還夫婦を対象とした。彼らに共通するのは、滞日中に回心してプロテスタント教会の信者となり、熱心に活動するなかで家庭集会を開くようになったという点である。いわば滞日中に宗教的リーダーとしての素質を身に着けたとみられる存在である。

A 夫婦のケース：A 夫婦はサンパウロ市中心から 450 キロ北部にある人口３,７万人の小さな町の出身である。主たる産業はサトウキビプランテーションで、住民の多くは関連の仕事に従事している。夫（1971 年生）は高校を卒業後 1991 年に、妻（1975 年生）は 1994 年に来日した。特定の目的はなかった。沼津、横浜、岐阜、で 5 年過ごし、豊田に移って 2009 年まで 14 年間過ごした。夫婦の不仲と夫の飲酒癖が原因で教会に通うようになり、1995 年、夫婦は回心した。それ以来貯金できるようになり、ブラジルに 3 万ドルで家を購入することができた。熱心な牧師の指導に感化され、ブラジルに帰国したら教会を開きたいと考えるようになった。その思いは家庭集会を主催することで強くなった。夫はブラジル人と比べて日本人は落ち着いていて喧嘩をしないという。そのような「理想的な日本人像」が彼自身の信仰スタイル形成に役立った。日本で生まれた娘が 5 歳になった時、娘の教育のことを考えて帰国することにした。帰国後、レストランを開いたが姉に譲り、司牧活動のみに従事するようになった。妻の兄弟や宴席関係のネットワークによって信者が増え、現在 50 名ほどの信者がいる。

B 夫婦のケース：B 夫婦はサンパウロ市中心から 320 キロ北部にある人口 60 万人の中堅的衛星都市出身である。夫（1959 年生）はサンパウロ大学を卒業後、コンピュータ会社を設立。高収入に恵まれたが忙殺されるルーティーンから逃れたいとの思いからデカセギを決意。妻（1971 年生）は高校卒業後、高級眼鏡店で就労。就労時間の違いが結果してか二人は不仲となり、デカセギで日本に行って一緒に働くことが解決策となるのではないかと考えた。2001 年に二人は夫の姉の紹介を得て豊田市で働き始めた。非日系人である妻は先進国日本というイメージと厳しい現実のギャップに苦しめられるも、願っていた夫婦関係の改善も叶わなかった。2002 年、妻は職場で知り合ったプロテスタント信者に誘われて教会に通うようになった。職場では昼休みにプロテスタント信者が集会を開いており、元来プロテスタントの家庭で育った夫はそこにも参加するようになった。二人は指導を受けて家庭集会を開き（2003 年）、信者には同じような経験をしている夫婦がたくさんいた。B 夫婦も A 夫婦同様一人息子の就学のことを考え、ブラジル帰国を決意した。2007 年に帰国して妻は眼鏡店で一時期再就職したが、かつて所有していた家屋を資金として自分の眼鏡店を開いた。彼らは帰国後すぐ家庭集会を開くようになった。信者は徐々に集まり、3 年後には家屋を借りて教会とした。研究代表者が訪問した 2011 年と 2012 年の間で、教会は大きな場所に移動し、信者数も増加したことが確認できた。

これら二つのケースは、司牧活動が帰国後の再適応戦略として有効に働いていることを物語っているといえよう。

⑵ブラジル帰国と再適応：カンポグランデ・ホーリネス教会

カンポグランデ・ホーリネス教会（マットグロッソ・ド・スール州）ではデカセギ現象がブームを迎える以前（1989-91）から神奈川県に働きに来る信者がいた。彼らは家族単位で来日し、日本で集会を開いた。1992 年にカンポグランデに建てられた立派な教会堂の資金の多くは彼らの献金によるところが大きい。こうした初期のデカセギ信者らは滞日期間が比較的短く、帰国後も自然と教会活動に参加するようになっているケースが多い。しかし、滞日が長期化することによってブラジルへの再適応のみならず、信者自身が「家庭」の延長として理解することのある出身の教会にさえ順応し辛さを感じているケースがみられた。この場合、同一教会内の信者ネットワークの形成は、信者であるという属性よりも人格的なつながりが重視されることを示唆している。

⑶デカセギ現象と日系宗教：マリンガ市の事例

マリンガ市（パラナ州）はブラジルのなかでも日系人人口の割合が高いことで知られ、日系人協会の敷地には 7 つの野球場があることもからも理解できるように、日系人の活動が極めて活発である。市内には主たる日系宗教の拠点があり、本研究では天理教、創価学会、世界救世教、日系カトリック教会、ホーリネス教会、ミッション・アポイオ教会、浄土宗日伯寺を対象とした。

日系人信者の割合が高い天理教、ホーリネ

ス教会、日系カトリック教会ではデカセギ現象によって信者数の減少という影響がみられたが、調査時点では多くの割合が帰国し、活動それ自体への影響は見られなかった。天理教の場合、日本の本部でのみ与えられる「おさづけの理」（宗教的救済のための秘儀）が得られ、デカセギをポジティブに捉えていることが特筆される。

調査は質問紙（30 部）を各教団施設から信者に配布してもらった。回答者は計 110 名で、回収率は順に、73%、36%、50%、43%、83%、86%、40%である。全対象者の帰国年別の構成は次の通りである。1991-1999 年の間に帰国した者 14 名。2000-2005 年、13 名。2006-2010 年、46 名。2011-2013 年、36 名。不明 1 名。

解答者にとってブラジルへの再適応は次の通りである。①容易だった（34%）、②比較的容易だった（44%）、③困難だった（18%）、④非常に困難だった（3%）。教団による違いは見られなかった。困難だと感じた理由には、ブラジルでは賃金が低く治安が悪いといったことが共通して見られ、現状を受け止めるようにという宗教の教えが役立ったという意見が多くの教団で確認できた。

⑷神の王国ユニバーサル教会の日本における展開

ブラジルで生まれたユニバーサル教会は、まさにグローバルに展開する教団として多くの研究者の注目を集めている。日本では 1995 年に群馬県で活動を開始し、現在では日系ブラジル人が集住する東海地方を中心に 21 か所の教会を開いている。静岡県浜松市には国内の活動の中心となる教会があり、二人の監督が国内の統括者として在住している。彼ら二人もブラジルからの派遣だが、そのうちの一人はオーストラリア、フィリピンで教会の責任者を経験している。彼の存在は教団がブラジル発のグローバル時代の宗教であることを物語る。

他の日本産ブラジル系プロテスタント教会と大きく異なる点は、彼らの財政力だろう。浜松市の教会は JR 駅前のビルの 1 階を占めている。そこで宗教法人格を得ていることから教会自前の物権であることがわかる。

その教会では宣教番組が作成されているとみられ、ケーブルテレビ（TV Record、ブラジルの教団が経営母体）を通じてデカセギ向けに毎日放映している。牧師を養成するための研修もその教会で行われ、費用は教会が賄う。そこで牧師となり、現在、国内の教会を担当しているのは 10 名。彼ら以外にも 10 名以上の牧師がブラジルから派遣されているようである。中央教会以外の教会はいずれも借家で至便な場所にあり、維持費だけでも相当なものであることがわかる。さらに自前のカラー刷りのフリーペーパーも出版されている。信者によれば、出版費の多くは信者の寄付によるという。

2014 年 5 月 3 日、浜松市アクトシティで「イスラエルの清めの油」集会が開かれた。例年何らかの集会が開かれているとのことで、会場には 4500 人の座席が準備されていた。参加者人数はおよそ 1500 人。筆者は名古屋教会のメンバーに同行した。朝 7 時半、教会に集まった信者は約 50 名。3 台の観光バスに分乗して現地に向かった。バスは信者グループが費用を賄い手配したという。

40 代の女性信者の一人は自身の入信を次のように語った。「以前は孤独感が強かった。教会に来てから内面が変わった。今は神様と聖霊が私の中に住んでいてくださっている。教会でオリエンテーションをしてもらったおかげだ。」また、4 歳で来日した 18 歳男性は小学校時代にいじめを受けたという。「若者の集会で牧師や伝道師から人に対して怒りを持つのでなく、状況に対して怒りを持たなければいけない。自分が変わらなければいけないと教えられた。それを理解して実行に移した。自分を変え人との接し方も変えた。すると、いじめがなくなった。」

現地に１時５０分に到着。集会は２時に開始した。舞台上のスクリーンにユニバーサル教会の宣教番組でよく流される信者の救済体験が映し出された。その後、30 名ほどの牧師が紹介され、信者の悪魔祓いがあった。4 時 20 分、監督牧師の呼びかけで参加者の約 3 分の 1 が壇上前に集まり牧師らの祝福を受けた。集会終了後、会場の外で教団創設者エジル・マセドの自伝『失うものは何もない』のサイン会が開かれた。この書籍は日本語翻訳はもちろんのこと、スペイン語にも翻訳されてスペインで販売されている。ここにも本教団のグローバル宣教戦略の一端が見て取れる。

⑸ブラジル系プロテスタント教会の脱領域的なコミュニティ

ブラジル系プロテスタント教会は在日ブラジル人の新しいコミュニティとして見做される。ミッション・アポイオ教会は、在日ブラジル人が宗教的欲求に駆り立てられて設立したもので、ブラジルや日本の特定教団の経済的援助や宗教的権威の支援を受けていない。信者の多くはブラジルで経済的利益を十分に享受できなかった人々で、宗教的メッセージや共感をもとにネットワークを広げていった。

この教会を社会関係資本の観点から考察すると、教会は一見すると親密性があり結束力の強いコミュニティのような印象を与えるが、実は橋渡し型社会関係資本をもとに信者が自由に教会を移動する脱伝統的なコミュニティであることがわかる。

在日ブラジル人は、日本の労働市場で正規から非正規へ雇用代替が進んだ時期に来日し始めた。1990 年代の長期不況以降、雇用・社会保険・公的扶助という三つのセーフティネットから漏れ落ちる非正規労働者が目立つようになり、ブラジル人の多くはそのような労働環境に構造的に組み込まれていった。

ミッション・アポイオ教会は、デカセギとして来日した二人の非日系ブラジル人が1993 年に日本で新たに設立した。精神的に苦悩する在日ブラジル人を宗教的に救済し、信者間に連携や連帯を形成することを目的とする。教会や信者は集権的というよりも分散的なネットワークによって緩やかに繋がっている。そのような組織形態のため、コミュニティは脱集権化が起こりやすく、これまでも教団から離れた牧師や信者がいる。信者は、職場や住居が変われば、教会を離れて移動することが多いため、信者間の結束力は必ずしも高くない。

信者の結束力をもたらすものは、①エスニシティ、②聖書による説教と宗教的実践の共有、③苦しみの分かち合いにある。それらが教団の結束型社会関係資本として「排他的なアイデンティティと等質な集団を強化」し、「コミュニティの中の比較的恵まれていないメンバーにとって、決定的に重要な精神的、社会的支え」となる（Putnam 2000）。

同教団には橋渡し型の社会関係資本が確認でき、それがこの教団の特徴を示している。それは、①教団横断的なフリーペーパー、②マーチ・フォー・ジーザスと呼ばれるエスニシティを超えた教会間活動、③宣教活動によるネットワークの拡大で、「さまざまな社会的亀裂をまたいで人々を包含」し、「外部資源との連携や、情報伝播」を促している（Putnam 2000）。

信者らは五年も経てば半数が入れ替わり、教会に留まることはない。しかし、教会の橋渡し型社会関係資本が新たなメンバーを獲得し、他の教会に移動することをも可能にする。信者らは国境を超え、諸教会の間をもいとも簡単に移動する。ポストモダンで脱領域的な特徴といえる。

⑹ヨーロッパのブラジル系プロテスタント教会

日本の事例との今後の比較研究のためポルトガルとスペインでブラジル系プロテスタント教会の活動状況を視察した。両国ともにヨーロッパ諸国への移民の窓口になっているという特徴があり、教会では人の移動が激しい。その意味で日本の教会で確認できた脱領域的なコミュニティの特徴が見て取れる。これは今後のテーマである。

⑺日本の韓国系・インドネシア系プロテスタント教会

日本国内のブラジル系プロテスタント教会と比較するため、これら二つの教会でも調査を行った。韓国系ではニューカマーとの共存がみられ、ネットワークの形成が進んでいる。さらに日本で定住した人々と母国に戻った人々をつなぐトランスナショナルなネットワークを形成しており、ブラジル系教会との共通点が指摘できる。

一方、インドネシア系教会は信者数の減少や、残留者が不況に悩んでいることから宗教活動の衰えが指摘できる。

これらのことから、日本のブラジル系教会は在留外国人の宗教運動として比較的規模の大きな展開を見せていることが指摘でき、本研究ではそのトランスナショナルな越境が顕著であることが明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

①山田政信「想像・創造される場としてのプロテスタント教会」『宗教研究』第 86 巻、第 4 輯、375、2013 年、64-65 頁（査読無）

②奥島美夏「逃亡と出会いの場？－東アジアのインドネシア人労働者にみる宗教トレンド」『Migrant Network』155 号、2012 年、14-15 頁（査読有）

③山田政信「ブラジル福音ホーリネス教会の宗教実践」『アメリカス研究』第 17 号、2012 年、59-102 頁（査読有）

〔学会発表〕（計　4　件）

①Masanobu Yamada, Do Japão ao Brasil: trânsitos religiosos, Faculdade de Ciências Sociais Humanas, Universidade da Beira Interior, 2015（招待講演）

② Masanobu Yamada, Formación de uma comunidade evangélica entre los decasséguis em Japón, XIV Congreso Internacional de la Asociación Latinoamericana de Estudios de Asia y Africa, Universidad de La Plata, 2013

③山田政信「想像・創造される場としてのプロテスタント教会」日本宗教学会学術大会、2012 年

④山田政信「日本産ブラジル系プロテスタント教会信者のブラジルへの再適応」、日本宗教学会学術大会、2011 年

〔図書〕（計　1　件）

山田政信（共著）『想像するコミュニティ』、晃洋書房、2014 年

６．研究組織

(1)研究代表者

山田政信（YAMADA MASANOBU）
天理大学・国際学部・教授
研究者番号：70434975

(2)研究分担者

魯ゼウォン（NOH JAEWON）
天理大学・国際学部・教授
研究者番号：30303572

(3) 研究分担者

奥島美夏（OKUSHIMA MIKA）
天理大学・国際学部・准教授
研究者番号：10337751